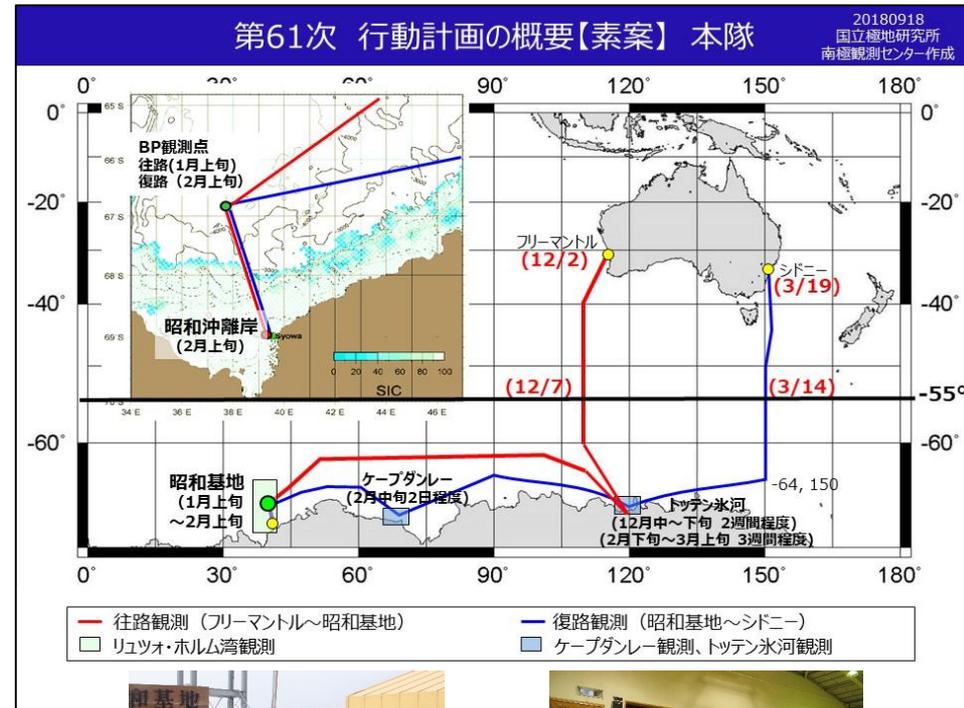


第152回（2018年6月開催）本部総会で決定した第61次南極地域観測計画の概要（素案）に基づき、第61次の行動計画は、重点研究観測サブテーマ2による棚氷融解が進むトッテン氷河沖での往復路に亘る集中的な海洋観測計画を中心として調整中（下図参照）。

このため、昭和基地沖での活動が約1か月程度となり、「南極授業」の機会も限られることから、悪天等による実施不能リスクを最大限回避するために、派遣人数を1名として実施に万全を期す。

<第61次隊での「南極授業」>

- 第61次隊の昭和基地沖での活動期間及び観測・設営計画を踏まえると、「南極授業」の実施回数見積もりは最大2回。
※実施1回あたり、現地でのリハーサル2回、国内との接続試験1回及び本番1回の計4回にわたり、5～10名×半日程度のマンパワーを要する。
- 教員2名派遣で各1回の実施となった場合、天候不良等により実施不能となり、どちらかの教員が、一度も「南極授業」を実施せず帰国となるリスクが高くなる。
- リスクを可能な限り回避するため、教員派遣人数を第61次隊では1名とし、当該教員が2回の「南極教室」を企画することで、実施に万全を期すことが有効。



※教員南極派遣プログラム

極地の科学や観測に興味を持つ現職教員を南極昭和基地に派遣し、衛星回線を利用して、現地から派遣教員が企画する「南極授業」を行うプログラム。国立極地研究所と公益財団法人日本極地研究振興会が現「しらせ」の就航に併せ2009年（第51次隊）より開始したものの。